

## 論述文における“(是)……的”構文と「ノダ」文の機能

劉 洋

### 要旨

本稿は、中国語の“(是)……的”構文と日本語の「ノダ」文の、論述文における機能の共通点と相違点について、焦点化の視点から考察したものである。共通点は、“(是)……的”構文と「ノダ」文が「対比」を表す機能をもっている点である。一方、相違点は、以下の4点にまとめられる。①後続文脈との関係において、“(是)……的”構文における焦点化された成分が「主題導入」機能を果たすことが多いのに対し、「ノダ」文はこうした機能をもっていない。②「ノダ」文は、“(是)……的”構文に見られない「問題設定」機能をもっている。③先行文脈との関係において、「ノダ」文は、先行文脈から導かれた結論を提示する「結論の提示」機能を果たすことが多いのに対し、“(是)……的”構文はこの機能を果たす場合が少なく、副次的な機能である。④“(是)……的”構文は、原因と条件から導かれた結論を提示したり、換言して結論を提示したりする機能をもっていない。

キーワード：“(是)……的”構文、「ノダ」文、焦点、機能

### 1 はじめに

中国語の“(是)……的”文は構造的には日本語の「ノダ」文と非常に似かよっている。次の(1)と(2)の通りである。

(1) 太郎 是 昨天 来 的。(太郎は昨日来たのだ。)

太郎 だ 昨日 来 の

(2) 太郎は昨日来たのだ。

また、“(是)……的”文と「ノダ」文は、いずれも情報を焦点化する場合に用いられる点においても類似している。(1)と(2)は、いずれも「太郎が来た」という出来事存在を前提として、“(是)……的”文と「ノダ」文を用いて動作の時間である“昨天”(昨日)を文の焦点としている。

しかし、実際の運用において、“(是)……的”構文は「ノダ」文と対応している場合もあれば、対応していない場合もある。たとえば、次の(3)は対応している例であり、(4)は対応していない例である。

(3) a. 他们是在前天夜班临下班时出事故死的。(盖棺)

b. 二人はおとといの夜勤のとき、退勤まぎわに事故で死んだのだ。(棺を蓋いて)

(4) a. 这一冬，烧的柴是队里派人给我们砍下的的。大队革委会主任叫徐财，跟我们说，公社通知，知青的烧柴，队里只管这一冬，然后陪着笑脸。(插队的故事)

b. この年の冬、私たちが燃やす薪は生産隊から人が来て集めてくれた。生産大隊革

命委員会徐財という主任がわれわれに対して、人民公社からの通知で都会から来た青年の薪は今年の冬に限って生産隊が面倒をみることになったと告げて追従笑いをした。  
(遙かなる大地)

本稿では、論述文における“(是)……的”文<sup>1</sup>と「ノダ」文の使用を考察して、両構文の論述文における機能の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。論述文が砂川(2005)で指摘された書き言葉の5つの特徴<sup>2</sup>をもっていることと、学習者の観点から学習者が論述文を書くときに役立つことを考慮して、論述文を調査対象にした。分析に用いた資料は、中国語は、2009年と2010年の『北京大学学報(哲学社会科学版)』の中から論文を40編抽出し、焦点を表す機能をもつ“(是)……的”文を全数取り出し、204例を収集した。日本語は、2004年と2006年の『一橋論叢』の中から論文を24編抽出し、「ノダ」文を全数取り出し、193例を収集した。

以下、まず第2節で“(是)……的”構文と「ノダ」文によって焦点化される成分の偏りの異同について述べ、第3節で中国語の論述文において“(是)……的”構文が果たす機能を考察する。第4節で日本語の論述文における「ノダ」文の機能を考察する。第5節で論述文における“(是)……的”構文と「ノダ」文の機能の共通点と相違点をまとめる。

## 2 焦点化された成分の偏り

Lambrecht (1994) は、文のどの成分が焦点になるかによって、焦点を「狭焦点 (narrow focus)」と「広焦点 (broad focus)」の2つに分けている。また、狭焦点は文中のある項が焦点となり、「項焦点 (argument-focus)」とも呼ぶ。広焦点は、述語が焦点となる「述語焦点 (predicate-focus)」と文全体が焦点となる「文焦点 (sentence-focus)」の2つに分かれると指摘している。中国語の“(是)……的”構文も日本語の「ノダ」文も、述語動詞の関与項、述部、文全体を焦点化することが可能である。しかし、論述文において具体的にどのような成分が焦点化されているかは、中国語と日本語では異なる偏りが見られた。

中国語の論述文において、今回40編の論文の中から収集した204例の焦点を表す“(是)……的”構文の中で、焦点化された成分は、副次補語である状況語が多く、全体の69%を占めている。必須補語は21%であり、状況語と必須補語を合わせて、文の項が焦点化される例は184例で、全体の90%を占めている。それに対して、述部が焦点化された広焦点の

<sup>1</sup> 刘月华 (2001) では、“(是)……的”という形式をもつ文には、(i)種類を表す“的”フレーズが述語になっている「(是)構文」、(ii)焦点を表す「“(是)……的”構文(1)」、(iii)主に話者の見方や見解、態度などを表すに用いられる「“(是)……的”構文(2)」の3種類の異なる文が存在していると指摘されている。本稿では、(ii)の「“(是)……的”構文(1)」を考察の対象としている。

<sup>2</sup> 砂川 (2005) では、典型的な書き言葉は以下の特徴をもつことが指摘されている。(1)一人の書き手による産物である。(2)構成や表現に関して十分に推敲されている。(3)主として情報伝達を目的とする。(4)談話の所産として完結し、完成されたテキストである。(5)音声を伴わず、特殊な表記法で示す場合を除いて、音声の再現は読者に任せられる。

例も 20 例あり、全体の 10%を占めている。文全体が焦点化される例は観察されなかった。

一方、日本語の論述文においては、今回収集した 193 例の中で、広焦点は 100 例と多く、全体の 52%を占めている。中でも、最も多いのは述部が焦点化される場合（54 例）であり、文全体が焦点化される例と主節が焦点化される例もそれぞれ 31 例と 15 例があった。二次補語である状況語は、中国語の出現割合より少なく、全部で 55 例あり、全体の 29%を占めている。表 1 は“(是)……的”構文と「ノダ」文によって焦点化される成分の偏りを示したものである。

表 1 焦点化された成分の偏り

	狭焦点		広焦点			合計
	状況語	必須補語	述部	文	主節	
中国語	141 (69%)	43 (21%)	20 (10%)	—	—	204 (100%)
	184 (90%)		20 (10%)			
日本語	55 (29%)	38 (19%)	54 (28%)	31 (16%)	15 (8%)	193 (100%)
	93 (48%)		100 (52%)			

小数点以下四捨五入

次の (5) ~ (7) は中国語の“(是)……的”構文の例であり、(8) ~ (12) は日本語の「ノダ」文の例である。( (5) ~ (7) の訳文は筆者による。以下、出典を明示しない訳文は筆者によるものである。)

(5) 当代生态价值观的建构是围绕如何看待人类中心主义价值观这一问题展开的。

(论生态学马克思主义的生态价值观) <状況語>

(現代の生態学的価値観の構築は如何に人間中心主義的な価値観を扱うかという問題をめぐって展開されている。)

(6) 流传至今而能够反映古人在国家规模上认识自己所生活的地理空间的早期地图,是北宋人制作的。(从古地图看中国的疆域及其观念) <必須補語>

(今まで伝わってきた、昔の人が国家規模における自分が生活している地理的空間を認識していることを反映した早期の地図は、北宋の人によって制作された。)

(7) 因此,我们说,“胜过”与“不及”都是在等同(近似)基础上进一步确认,补充,追加出来的。(“不比”句多义性动因考察) <述部>

(従って、我々は、“胜过”と“不及”はどちらも同列(近似)という意味の上でさらに確認、補足、追加されたものであると考えている。)

(8) しかし、歴史理解のもう一つの方法として、植民地期と呼ばれる時代を、後の国民国家からの遡及において論じるのではなく、国民国家との差異を強調して論じる方法もあるだろう。(アメリカ植民地期フィリピンの教育に関する予備的考察)

〈状況語〉

- (9) しかし、アメリカで生まれ育った標準原価計算とは異なり、トヨタにおける「標準作業」はスタッフが作成するものではない。現場の作業者自身が作成するのである。

(市場・技術・組織と管理会計)

〈必須補語〉

- (10) 以下では、Big Issue の設立プロセスを検討していくが、そもそも 90 年代前半の英国において上記のような判断基準に沿った選択プロセスは存在したのか、という問題がある。(「ソーシャル・ビジネス」概念の形成と課題)

〈述部〉

- (11) すなわち、会計発生高に含まれているノイズが大きければ大きいほどその質は低くなり、利益の質も低下させるのである。(利益の質と企業の特性)

〈文〉

- (12) また、営業量が不確実であるから、予算管理が必要になったのだし、変更予算も工夫されたのである。(市場・技術・組織と管理会計)

〈主節〉

以上、今回の調査で示されたように、中国語の“(是) ……的”構文と日本語の「ノダ」文によって焦点化される成分の最も顕著な相違点は、中国語は状況語という「狭焦点」が多いのに対して、日本語は述部、文、主節という「広焦点」が多いことである。これは、中国語の“(是) ……的”構文が「1つの事態の内容限定」と日本語の「ノダ」文の「2つの事態の関係づけ」という基本的な性質における相違<sup>3</sup>によるものだと考えられる。

中国語の“(是) ……的”構文は、木村(2003)が指摘したように、ある実現した特定の動作行為に対して、その動作行為に関与する何らかの関与項(動作者、受動者、地点、時点、道具、手段、受給者、共同者など)を基準に区分的限定を加え、当該動作(行為)の属性を措定使用とするものである。したがって、実現した動作行為は文の前提であり、その動作行為を区分的限定する基準となる関与項は当然その文の焦点になりやすいのである。これに対して、日本語の「ノダ」文は、田野村(1990)で指摘されたように、ある事態 $\alpha$ の背後にある別の事態 $\beta$ を提示するものである。したがって、事態 $\alpha$ が前提であれば、背後にある別の事態である $\beta$ が焦点になるのである。 $\beta$ が事柄であるため、文、主節、述部で表わされている。

“(是) ……的”構文と「ノダ」文のこういった基本的な相違から、両構文が論述文において果たす機能も大きな違いを見せていると予測される。次節から両構文が論述文においてそれぞれどのような機能を果たすかについて述べる。

### 3 “(是) ……的”構文の機能

中国語の論述文において、“(是) ……的”構文の機能は、「主題導入」「対比」「結論の提示」の3つのパターンが観察された。その中では、主題導入で使われている例が最も

<sup>3</sup> この点については、井上(2003)で指摘されている。そして、井上(2003)はこの「一つの事態の内容限定」と「二つの事態の関係づけ」の違いの背景には、それぞれ基盤とする「の」の「名詞化」の質の違いによるものだと指摘している。

多く、全体の48% (98例) を占めている。次いで、対比で使われている“(是)……的”構文で、全体の23% (48例) を占めている。また、段落の最後に用いられ、結論を提示する例も少ないながら、観察された。具体的には次の表2を参照されたい。

表2 “(是)……的”構文の機能

主題導入	対比	結論の提示	その他 <sup>4</sup>	合計
98 (48%)	48 (23%)	18 (9%)	40 (20%)	204 (100%)

小数点以下四捨五入

### 3.1 主題導入

主題導入は、“(是)……的”構文によって焦点化された情報を、後続文脈でさらに詳しく説明したり、解釈したり、例を挙げたりする場合である。まず詳述の例を見てみる。

(13) //从历史上看，儒学的发展从来不是封闭的，而是在整个“国学”的文化背景中进行的。什么是“国学”？“国学”一词最早见于《周礼·周官·乐师》(略)。

(从国学内涵的演变谈《儒藏》的编纂)

(歴史的に見れば、儒教の発展は閉じられた範囲で行われたものではなく、「国学」という文化背景の中で行われたのである。「国学」とは何であるか。「国学」という言葉は最初に『周礼・周官・乐师』に出現した。(略)

(13)の“(是)……的”構文によって焦点化された成分は範囲を表す“在整个“国学”的文化背景中(「国学」という文化背景の中)”であり、その後は波線の部分で国学とは何か、国学という言葉の出所など、“国学(国学)”について詳しく説明している。詳述する主題を導入する“(是)……的”構文は(13)のように段落の最初に現れやすいが、次の(14)のように段落の最後に現れ、その次の段落から詳しく説明する場合もある。

(14) 当然，元，白二人言论的着眼点和具体评价意见都有所不同，但这并不代表他们之间有何实质性的意见分歧，而是由他们发表意见的场合不同所决定的。

//元稹之论完全从正面评价杜甫的创作成就，这是由于他所作的是墓志，(略)。

//在白居易的《与元九书》中，这层意思表达得更为清楚透彻。《与元九书》由于是两位好友之间倾诉衷肠(略)。(李杜优劣争论的背后)

(当然，元氏と白氏の言論の着眼点と具体的な評価意見に相違があるが、それは二人の間に何らかの本質的な違いがあることを意味するのではない。その違いは二人

<sup>4</sup> 次のような、「主題導入」「対比」「結論の提示」のいずれの類にも属さない例は「その他」である。

i) 这家中心是他1966年从日本留学回国以后创办的。成员已经遍布北美，包括美国，加拿大，墨西哥，乃至欧洲国家。(このセンターは彼が1966年日本留学から帰国後に創立した。メンバーはアメリカ，カナダ，メキシコを含む北米，及び欧州諸国で活躍している。)

ii) 在试验中，财富是随机分配或给定的，排除了效率因素。(実験のとき，財産が無作為に割り当てられ，効率性による影響を排除した。)

の意見を発表する異なる場面によるものである。//元氏は完全に肯定的に杜甫の作品を評価している。それは元氏が書いたのが墓誌であり、(略) //白居易の『与元九書』の中で、この意味が一層明らかに表明されている。『与元九書』は友達同士で意見を交流するものである(略。)

(14) の段落の最後に、「元氏と白氏の言論の着眼点と具体的な評価意見が違うのは、二人の意見を発表する場面が違うからだ」と“(是)……的”構文によって、“他们发表意见的情况不同(二人の意見を発表する場面が違う)”を導入して、次の段落で「元氏」が発表したのが「墓誌」であると述べ、さらにその次の段落で「白氏」が発表したのが「友達への手紙」であると、それぞれ詳しく説明している。

次に、解釈の場合の例を見てみる。後続文脈で“(是)……的”構文によって導入された成分について、解釈を加える場合は、“即(即ち)”, “也就是(即ち)”といった接続表現が用いられやすい。(15)は“(是)……的”構文によって焦点化された「国民の基本的な生活の主要な面」とは何かというと、その次の文脈で「失業保険, 貧困救助, 医療保険, 住宅保障及び老人・障害者介護サービス」であると説明している。

(15) 它是涵盖居民基本生活的主要方面的, 即这种福利涵盖了国民(或当地居民)基本生活的最重要方面, 如失业保险, 贫困救助, 医疗保险, 住房保障及老人, 残障服务等。(我国适度普惠型社会福利制度的建构)

(それは国民の基本的な生活の主要な面を含んでいる。すなわち、この福祉制度は国民(またはその地域の住民)の基本的な生活の最も重要な面、失業保険, 貧困救助, 医療保険, 住宅保障及び老人・障害者介護サービスなどを含んでいる。)

また、“(是)……的”構文によって焦点化された成分について、後続文脈で具体例を挙げる場合もよくある。次の(16)は“新诗坛出现的许多问题, 主要都是环绕着语言而产生的(新詩壇で起こった数多くの問題は、ほとんど言葉をめぐって生じる問題である)”と、“环绕着语言(言葉をめぐって)”が“(是)……的”構文によって焦点化されている。その後の文脈で、「たとえば、初期の文言詩と白話詩の問題, 後期の自由詩と伝統的な格律詩の問題, 及び50年代の英語の「音歩」形式と中国語の「幾言」形式の問題」と具体的な例を挙げている。

(16) 今天, 回顾新诗坛上出现的许多问题, 主要都是环绕着语言而产生的, 如初期的文言诗与白话诗之争, 后期的自由诗与格律诗之争, 以及50年代西语的‘音步’格式与汉语的‘几言’格式之争, 都是出自语言上的问题。

(诗歌形式研究的古为今用)

(今日、新詩壇で起こった数多くの問題を振り返ってみれば、言葉をめぐって生じた問題がほとんどである。たとえば、初期の文言詩と白話詩の問題, 後期の自由詩と伝統的な格律詩の問題, 及び50年代の英語の「音歩」形式と中国語の「幾言」形式の問題, いずれも言葉による問題である。)

### 3.2 対比

“(是)……的”構文は焦点化された成分は、先行文脈また後続文脈と対比関係をもつ使用は、中国語の論述文によく見られた。次の(17)はその例である。

(17) 文学虽然起源于口头，但其高度的发展，是借助文字与书面写作而达到的。

(文人文学的发生与早期文人群体的阶层特征)

(文学は口承文芸の形に起源したが、その高い発展度は文字と書かれた文章の形によって実現されたのである。)

(17)の先行文脈で“起源于口头”(口承文芸の形に起源した)と述べられた後、後続文脈で“其高度的发展，是借助文字与书面写作而达到的”(その高い発展度は文字と書かれた文章の形によって実現された)と述べられ、“(是)……的”構文によって焦点化された“文字与书面写作”(文字と書かれた文章の形)が、先行文脈の“口头”(口承文芸の形)と対比されている。

対比関係の焦点化において、“不是……的，而是……的”のような否定・肯定の“(是)……的”構文を用いて対比関係を表すのが中国語の特徴である。次のような例である。

(18) “不比”句表现出来差比义实际上不是通过“不比”句本身表示出来的，而是通过“不比”句后续句表示出来的。

(“不比”句多义性动因考察)

(「不比」文がもつ差の意味は、「不比」文そのものによって表されたのではなく、「不比」文の後続文によって表されたのである。)

また、以上のような「対立的対比」以外に、「並立的対比」の場合に、“(是)……的”構文の使用も観察された。次の(19)のような例である。

(19) 这些生产经验和劳动技能在个体小生产中是通过父传子，师傅带徒弟等方式获得的，现代化生产中的科学知识则是通过教育获得的。

(澄清对“两种生产”理论的误解)

(これらの生産経験と労働技能は、個人的な小規模生産においては、親から子へ、師匠から弟子へという方法で取得されたが、近代的大規模生産における科学的知識は、教育によって獲得されたのである。)

### 3.3 結論の提示

段落の最後に用いられ、それまでの内容から導かれた結論を提示し、談話を結ぶ“(是)……的”構文の使用も少ないながら(9%)、観察された。この場合は、“这表明”(これが示していること)、“因此”(したがって)、“由此来看”(以上のことからみれば)など、結論を導くような接続表現と共起しやすい。

(20) 从收录著作采取的标准来看，《佛藏》收录儒道著作的标准大都是以佛解儒道，或以儒道来显佛，例如(略)，《道藏》也是如此，其收录的著作的标准是以道观儒佛，以儒佛来显道，(略)。这表明佛教或者道教毕竟具有不同于其他两家思想的文化

精神和终极追求，《佛藏》或《道藏》还是一家之藏，是围绕着自家思想的发展来选择典籍著作的。（从国学内涵的演变谈《儒藏》的编纂）

（作品の採用基準から見れば、《仏藏》は仏教をもって儒教と道教を説明する、または儒教と道教をもって仏教をもちあげる作品が採用されている。例えば（略）。《道藏》も同じように、道教の視点から儒教と仏教を見る、または儒教と仏教をもって道教をもちあげる作品が収録されている。（略）つまり、仏教又は道教は、結局のところ、それぞれがその他の2つの宗教と異なる独自の世界観と追求をもっていて、《仏藏》も《道藏》もそれぞれはあくまでも一家の作品集であり、それぞれの思想の流れに基づいて書籍を選択しているのである。）

(20) は、「《仏藏》」と「《道藏》」がそれぞれにどのような作品が収録されているかについて述べている。まず、《仏藏》に収録された作品の特徴（「仏教をもって儒教と道教を説明する、または儒教と道教をもって仏教をもちあげる作品」）が述べられ、次に《道藏》に収録された作品の特徴（「道教の視点から儒教と仏教を見る、または儒教と仏教をもって道教をもちあげる作品」）が述べられ、最後に、それぞれの特徴から一般化した結論“是围绕着自家思想的发展来选择典籍著作的”（それぞれの思想の流れに基づいて書籍を選択している）と“（是）……的”構文によって収録の基準を焦点化して提示する。

以上、中国語の論述文における“是……的”構文が果たす「主題導入」「対比」「結論の提示」という機能について述べた。次節から、日本語の論述文における「ノダ」文の機能を考察し、中国語の“是……的”構文との共通点と相違点について述べる。

#### 4 「ノダ」文の機能

中国語の論述文において、“（是）……的”構文が「主題導入」「対比」「結論の提示」の3つの機能を果たすのに対し、日本語の論述文において、「ノダ」文が果たす機能は「結論の提示」<sup>5</sup>「問題設定」「対比」の3つのパターンが観察された。その中で、最も多いのは結論の提示であり、全体の47%（90例）を占めている。その次は問題設定と対比で使用された「ノダ」文で、それぞれ21%（41例）と19%（37例）である。次の表3は「ノダ」文の機能を示したものである。

表3 「ノダ」文の機能

結論の提示	問題設定	対比	その他 <sup>6</sup>	合計
90 (47%)	41 (21%)	37 (19%)	25 (13%)	193 (100%)

小数点以下四捨五入

<sup>5</sup> 「ノダ」文が結論を述べたり、締めくくりをつける形で、あるまとまった文章の終わりに来やすいということについて、今村（1996）などでも指摘されている。

<sup>6</sup> 次のような、「結論の提示」「問題設定」「対比」のいずれの類にも属さない例は「その他」である。i) NPOは実際にどのような機能を果たしているのかを説明するものである。

#### 4.1 結論の提示

日本語の論述文において、それまでの論述を踏まえて結論を示すときに「ノダ」文が用いられやすい。具体的に、(i) それまでの内容をまとめて結論を提示する、(ii) 先行文脈で述べられた原因から導かれた結論を提示する、(iii) 先行文脈で述べられた条件から導かれた結論を提示する、(iv) 先行文脈で述べられた内容と同じことを別の表現で言い直して結論を提示するの4つのパターンが観察された。その中で(i)は「ノダ」文がグローバルに機能する場合であり、(ii)～(iv)はローカルに機能する場合である。

まず、それまでの内容をまとめて結論を提示する場合に、「つまり」、「こうして」のような接続表現と共起するものが多い。次の例は波線部の内容をまとめた結論を「ノダ文」によって提示するもので、「つまり」と共起する例である。

- (21) //このように量的な側面からは次のようにまとめられる。一方では1930年代後半の高い伸び率を除けば、小学校低学年であっても就学率は多く見積もって60%台前半以上には上がらず、全学童教育が達成されたとは言えない。その反面、小学校の就学率は植民地期を通じて上昇傾向にあり、学校制度が拡大し、学齢人口の中でより高い比率の生徒が小学校教育を受けるようになったことが示されている。つまり、バロウズが求めていたような大衆の教育はアメリカ植民地期を通して十分には行なわれなかったが、学校教育は確実に拡大しつづけたのである。

(アメリカ植民地期フィリピンの教育に関する予備的考察)

先行文脈で述べられた原因から導かれた結論を、「ノダ」文によって提示する場合は、「したがって」、「よって」、「それゆえ」、「その結果」、「そこで」などの順接を表す接続表現と共起しやすい。次の(22)は波線部が原因であり、その後続文脈では結論を提示するのに「ノダ」文が用いられている。

- (22) 満州国には、多くの民族が複合的に居住しており、地域ごとに制度が異なったり、諸制度が重層的に展開していた。それゆえ、地籍整理事業により、国内のあらゆる事業と関連をもつ土地制度を統一し、土地権利関係を明確にすることが、中央集権体制を確立するうえでの基礎的な作業であると位置付けられたのである。

(「満州国」初期における土地政策の立案とその展開)

先行文脈で述べられた条件から導かれた結論を提示する場合に用いられた「ノダ」文は、文中に用いられ、ローカルに機能する場合が多い。次のようである。

- (23) 労働時間を一定とすると、労働強化がなされたのに、それに見合って賃金が上昇しないとすれば、その場合には、賃金は労働力の価値以下に引き下げられたのであり、それによって生じた剰余価値は、本来の剰余価値ではなく、超過的な剰余価値であろう。

(「労働の強化」と絶対的剰余価値生産)

- (24) したがって、もしその労働生産力の上昇に比例して、この強められた労働をする

労働力の個別的価値が上昇すると仮定するならば、必要労働時間は短縮しないのであり、しかも、それでいて、特別剰余価値はちゃんと生じるのである。

(特別剰余価値生産の基本的性格)

また、先行文脈で述べられた内容と同じことを、別の表現で言い直して結論を提示する例も観察された。この場合は「すなわち」と共起しやすい。(25)は先行文脈の波線部で述べられた内容と同じことを、「ノダ」文で言い直して結論を提示している。

- (25) 裁量的会計発生高は情報の観点から見ればノイズであり、このノイズは会計発生高を歪めてその質を下げるだけでなく、ひいては利益の質まで下げることになる。なぜならば会計発生高は利益の主要な構成要素であるためである。すなわち、会計発生高に含まれているノイズが大きければ大きいほどその質は低くなり、利益の質も低下させるのである。 (利益の質と企業特性)

中国語の論述文において、結論の提示という機能を果たす“(是)……的”構文の使用例も観察されたが、①使用例が少ない、②原因と条件から導かれた結論を提示する例はない、③換言して結論を提示する例がないという3点において日本語の「ノダ」文と異なっている。

## 4.2 問題設定

日本語の論述文において、「ノダ」文の疑問文「ノカ」が用いられ、論述する問題点が提示される場合も少なくない。この場合は、転換型の接続表現「では」「それでは」と共起するものが多い。次の(26)と(27)はいずれもそれまでの内容で先行研究についての内容が述べられ、それを踏まえて取り扱う問題が何かを述べる場合に「ノダ」文が用いられている。(26)は「それでは」と共起する例であり、(27)は「では」と共起する例である。

- (26) // それでは米国とは異なる日本特有のシンジケートメンバーの構成はIPO企業の公開価格にどういった影響を及ぼしているのだろうか。こうした研究を行うことで、発行企業からみれば主幹事証券会社の選択問題、主幹事証券会社からみればシンジケートメンバーの選択問題に示唆を与えることができるであろう。

(引受シンジケートの構成が新規公開価格に与える影響)

- (27) この理解をナショナリズムの目的論的アプローチと呼ぶことにしたい。では、マゴールドの言う植民者の特権に焦点を定めると、ナショナリズムはどのように理解できるのだろうか。国家論における国民国家と植民地国家の差異から論じてみたい。

(ナショナリズムへのアプローチと植民地教育)

中国語の“是……的”構文はこのような機能はもっていない。(26)と(27)はいずれも中国語の“是……的”構文と対応していない。

### 4.3 対比

日本語の「ノダ」文は中国語の“(是)……的”構文と同じように、先行文脈また後続文脈と対比関係をもつ場合によく使われている。次の(28)(29)は「ノダ」文によって焦点化された傍点部が先行文脈または後続文脈の波線部と対比されている。

(28) しかし、アメリカで生まれ育った標準原価計算とは異なり、トヨタにおける「標準作業」はスタッフが作成するものではない。現場の作業者自身が作成するのある。(市場・技術・組織と管理会計)

(29) トヨタにおける従業員の役割期待は、伝統的管理会計で想定されてきたものとは大きく異なり、上司の命令に従って仕事を行うのではなく、自主的判断を行いながら仕事を行うことが期待されている。(市場・技術・組織と管理会計)

(28)の「ノダ」文の焦点である「現場の作業者自身」と先行文脈の「スタッフ」と対比されている。(29)は「ノダ」文の否定形の焦点である「上司の命令に従って」と後続文脈の「自主的判断を行いながら」と対比されている。

「ノダ」文が対比の機能をもつ点は中国語の“(是)……的”構文と共通しているが、“(是)……的”構文が「並列的対比」にも用いられるのに対し、日本語の「ノダ」文が「～のであり、～のである。」のような並列的対比の使用が観察されなかった点で異なる。

### 5 まとめ

以上、焦点化の視点から、論述文における“(是)……的”構文と「ノダ」文機能を考察した。論述文という談話において、“(是)……的”構文と「ノダ」文が果たす機能の共通点と相違点は次の表4のようにまとめられる。

表4 論述文における“(是)……的”構文と「ノダ」文の機能

	後続文脈を導入する			先行文脈を受ける		
	主題導入	問題設定	対比	結論の提示		対比
				グローバル (まとめ)	ローカル (原因, 条件, 換言)	
中国語	○	—	○	△	—	○
日本語	—	○	○	○	○	○

“(是)……的”構文と「ノダ」文が「対比」を表す機能を共通してもっているが、以下のような4点において相違が見られた。

相違点1:“(是)……的”構文は、焦点化された「狭焦点」を、後続文脈でさらに詳しく説明したり、解釈したり、例を挙げたりする「主題導入」機能を果たすことが多いが、「ノダ」文はこのような機能をもっていない。

相違点2:「ノダ」文は、「ノカ」の形式で、取り扱う問題を提示する「問題設定」機能

をもっているが、“(是) ……的”構文はこの機能をもっていない。

相違点 3: 「ノダ」文は、先行文脈から導かれた結論を提示する「結論の提示」機能を果たすことが多いが、“(是) ……的”構文はこの機能を果たす場合が少ない。

相違点 4: “(是) ……的”構文は、原因と条件から導かれた結論を提示する、換言して結論を提示する機能をもっていない。

#### 〈参考文献〉

井上優 2003 「「のだ」文と“的”構文」『中国語学』250: pp.264-274

今村和宏 1996 「論述文における「のだ」文のさじ加減—上級日本語学習者に文の調子を伝える試み」『言語文化』Vol.33: pp.51-78

木村英樹 2003 「“的”字句の句式语义及“的”字的功能扩展」『中国语文』第4期: pp.14-21

砂川有里子 2005 『文法と談話の接点』くろしお出版

田野村忠温 1990 『現代日本語の文法 I : 「のだ」の意味と用法』和泉書院

Lambrecht, Knut 1994. *Information Structure Sentence Structure*. Cambridge University Press.

刘月华等 2001 『实用现代汉语语法』(2004 增订本) 商务印书馆

#### 〈例文出典〉

『盖棺』『棺を蓋いて』『插队的故事』『遙かなる大地』: 『日対訳コーパス』(中日対訳語料庫) 北京日本学研究中心

『「労働の強化」と絶対的剰余価値生産』: 『一橋論叢』131 (6)

『市場・技術・組織と管理会計』『引受シンジケートの構成が新規公開価格に与える影響』『利益の質と企業特性』『「ソーシャル・ビジネス」概念の形成と課題』: 『一橋論叢』132 (5)

『特別剰余価値生産の基本的性格』『「満州国」初期における土地政策の立案とその展開』: 『一橋論叢』132 (6)

『李杜优劣争论的背后』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2009 年第 2 期

『“不比”句多义性动因考察』『我国适度普惠型社会福利制度的建构』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2009 年第 3 期

『从国学内涵的演变谈《儒藏》的编纂』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2009 年第 4 期

『论生态学马克思主义的生态价值观』『澄清对“两种生产”理论的误解』『文人文学的发生与早期文人群体的阶层特征』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2009 年第 5 期

『从古地图看中国的疆域及其观念』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2010 年第 3 期

『诗歌形式研究的古为今用——林庚先生关于古诗节奏和新诗格律的理论思考』: 『北京大学学报(哲学社会版)』2010 年第 4 期